

# 『まるごと 日本のことばと文化』を使った 初級クラスにおける日本語教育の試み

ヨフコバ四位 エレオノラ（富山大学）  
yovshii@las.u-toyama.ac.jp

## 【要約】

本稿は富山大学大学院医学薬学研究部の留学生を対象に行った初級クラスでの『まるごと』を使った日本語教育の試みの実践報告である。富山大学の医学薬学研究部に所属する留学生はアカデミックな場面では英語使用が比較的多いためアカデミックな日本語を必要としない。しかし、実りある留学生活を送るためには高度な生活日本語能力が必須である。これまでに本プログラムの初級クラスでは様々な教科書が使われてきたが、どれもが表記や語彙の面においては学習者への負担が大きく、学習者のニーズに対応しなかった。そのため、使用教材の見直しが重要な課題となった。使用教材の見直しの結果、『まるごと』が採用された。

## 1. はじめに

富山大学は2005年に富山県内の3大学（富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学）が再編・統合した総合国立大学である。2018年度の入学から教養教育の一元化を目指し、準備が進められているが、現在は、授業は元通り旧大学の各キャンパス（五幅キャンパス、杉谷キャンパス、高岡キャンパス）で行われている。五幅キャンパスには富山大学の外国人留学生の日本語教育を推進している国際交流センターがあるが、医学薬学研究部に所属する留学生のためには、医学薬学部のキャンパス（杉谷キャンパス）においても日本語日本事情教育のプログラム（以下、杉谷日本語プログラム）が開講されている。本実践は杉谷日本語プログラムで実施したものである。

## 2. 杉谷日本語プログラムの概要

杉谷日本語プログラムは、専任教員1名と非常勤講師5名により運営されており、5レベル（初級前半、初級後半、中級前半、中級後半、上級前半）13コマから構成されている。2011年度後期からは初級に1クラス、また2012年度前期からは中級に2クラスの、学生支援者を受け入れた対話活動クラスが作られた。日本語・日本事情コースでは、医学薬学研究部に在籍している外国人留学生（大学院生、研究生、研究員）が学んでいる。2016年度には、11ヵ国（中国、ベトナム、パキスタン、バングラデシュ、ベラルーシ、エジプト、ネパール、モンゴル、ハンガリー、インドネシア、カナダ）からの約45名が在籍している。日本語コースでは、生活日本語を中心に教育が行われている。また、日本事情クラスを別に設けず、日本語クラスの中で、日本社会や文化などが取り扱われている。

杉谷日本語コースの構成は表1の通りである。

表1 杉谷日本語コースの構成

レベル	初級前半 A	初級後半 B	中級前半 C	中級後半 D	上級前半 E	対話クラス DE
授業時間	週4コマ× 15回	週3コマ× 15回	週3コマ× 15回	週1コマ× 15回	週1コマ× 15回	週1コマ× 15回
主教材	『まるごと 入門・初級1』 「りかい」編	『できる日本 語初級』	『できる日本 語初中級』	『J—Bridge 中級』	自作 教材	
1クラスの 学習者数	5名～10名					

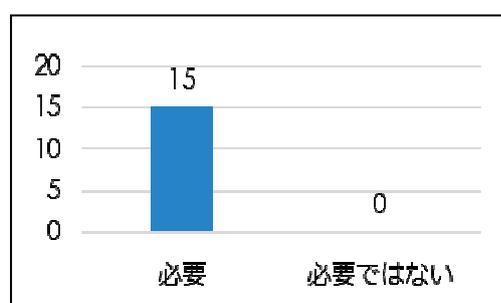
BレベルとCレベルのそれぞれの3コマ中の2コマが総合日本語の授業として実施され、残りの1コマが対話の授業として実施されている。対話DEは、DレベルとEレベルの学生を対象に開講されている合同の対話クラスである。どのレベルの授業も学期ごとに開講されており、AからDまでの昇級は成績で決まる。成績が60点未満の学生及び教員の所見で昇級できないと判定された学生に対しては、同じレベルの再受講が求められている。

医学薬学研究部に在籍している留学生および留学生の日本語使用の状況には以下のような特徴がある。

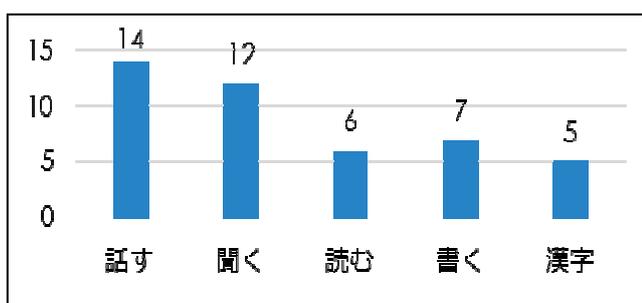
- ①アジアからの留学生が多く、在籍者の60%くらいが漢字圏からの留学生である
- ②アカデミックな場面（研究室、発表、論文など）では英語の使用が比較的多い
- ③日本語の使用は日常会話に限る
- ④研究室以外の場所で日本人との接触は極めて少ない

研究室の中で英語の使用が原則であるといっても、現状としては英語能力が高くない留学生もいる。また、同伴している家族、特に子供のためには、学外（保育園や学校など）での日本語の使用が強いられている留学生が多い。そのため、十分な生活日本語能力が必須である。2015年度の秋学期に行ったニーズ調査（その結果の一部がグラフ1～3にある）からは、日本語の必要性が極めて高いことがわかる（グラフ1）。また、日本語のスキルの中では、コミュニケーションにつながる「話す」・「聞く」の必要性が最も高いことがわかる（グラフ2）。

グラフ1 「日本語の必要性」

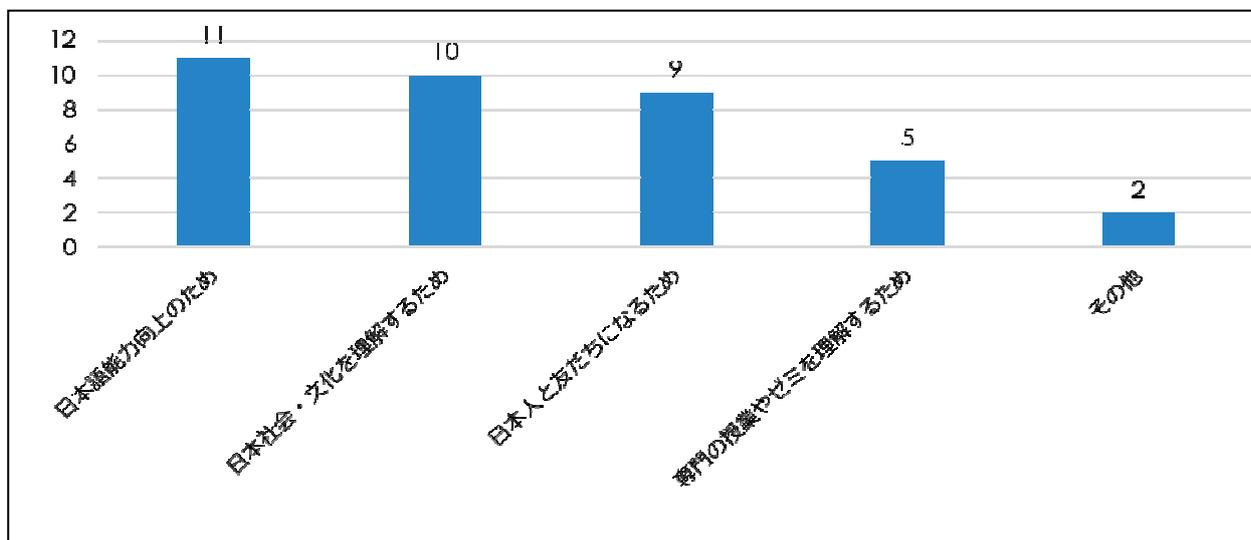


グラフ2 「日本語の必要なスキル」（複数回答可）



さらに、日本語学習目的として最も多く挙げられたのは、日本語能力向上と日本社会・文化の理解ということであった。(グラフ3)。

グラフ3 「日本語コースに参加している目的」(複数回答可)



### 3. 『まるごと』を使った初級クラスでの試み

#### 3. 1 クラスの概要

『まるごと』が使用されたのは初級前半のクラス(以下、Aクラス)であった。2016年度前期のAクラスの学習者数は8名であった。そのうちの4名が未習者であった。残りの4名のうちの2名が再履修者で、1名が数年前に初級で少し勉強した学生で、残りの1名が仮名の読み書きのみができる学生であった。既習者4名に対しては学期開始時にプレースメントテストを行ったが、4人ともスコアが非常に低く、未習者とほぼ同じレベルであったため、Aクラスにプレイスされた。Aクラスの学習者の出身地は次の通りであった: エジプト(2名)、ネパール(1名)、中国(1名)、ベラルーシ(1名)、ベトナム(1名)、バングラデシュ(1名)。

Aクラスの目的を以下のように設定したが、今回のコースでは、特に④と⑥を重視し、達成を目指した。

- ①毎日の生活に必要な、簡単なコミュニケーションができるようになる
- ②周りの人の話を、興味を持って聞き、簡単な質問ができるようになる
- ③生活に必要な情報を取り対応するために、周りの人に働きかけることができるようになる
- ④生活に必要な読み書きができるようになるための基礎としてひらがなが読める・書けるようになる
- ⑤一段落ぐらいの短い文章が書けるようになる
- ⑥最低Cレベルまでの基礎日本語学習へのモチベーションを保つ

#### 3. 2 『まるごと』使用に至った経緯および教材の選定基準

本プログラムの初級クラスではこれまでに様々な教科書が使われてきたが、どれもが表記や語彙の面においては学習者への負担が大きく、学習者のニーズおよびクラスの目標には対応しなかった。そのため、使用教材の見直しが必要となった。使用教材の見直しの結果、『まるごと』が採用された。A

クラスでは『まるごと入門』および『まるごと初級1』のそれぞれの『りかい』編が使用されることとなった。本コースで『まるごと』が選定されたのは、『まるごと』の次のような特徴のためである：

#### ①語彙

- 1) 1課あたりの語彙量がコントロールされており、学習への負担が少ない
- 2) 生活にすぐに役立つような語彙が選定されている
- 3) 学習者が自分で語彙を増やしていける仕組みが施されている (cf. 語彙帳の「わたしの言葉リスト」)

#### ②表記

『入門』には、仮名表記とローマ字表記があり、仮名が定着するまでは、ローマ字表記で学習ができる。

#### ③トピック

##### 1) 繰り返し出てくる

一部のトピックに関しては、同じトピックが繰り返し出てき、2回目以降は、話題が学習者にとっては身近なものとなっているため、語彙や内容の負担が少なく、学習者は文法項目の習得に専念できる。例えば、「わたしのしゅみ」は『入門』の11課と『初級1』の2課のそれぞれに出題されているが、前者では【わたしのしゅみはNです】という文型、後者では【わたしのしゅみはVことです】という文型が導入されている。

##### 2) 身近で話しやすい話題

身近で話しやすい話題が多いので、学習者は自発的に自分のことを話したり、相手のことを聞いたりしたくなる

#### ④会話

一つ一つ会話が短くまとまっており、学習者は大きな負担感を感じることなく、取り組むことができる。

#### ⑤文法

1) 文法は積み上げ式ではないため、コミュニケーションのニーズを考慮した順で提示されている。

(例えば、『入門』の3課には「～ができます」が提示されている。)

2) 文型も、トピック同様、同じ文型が異なるトピックで繰り返し出てくるようになっている（「～がすきです」→『入門』L. 5, L. 11、「～ができます」→『入門』L. 3, L. 11、形容詞過去形→『入門』L. 17, 『初級1』 L. 4 など）ため、定着を図る学習指導ができる。

#### ⑥自立学習リソース

内容に沿った充実した自立学習のウェブサイト（『まるごと plus』）があり、学習者は授業外でも自習や復習ができる。

### 3. 3 授業の進め方

Aクラスでは3人の担当者（専任1名、非常勤2名）で週4コマ（1コマ×90分）の計60回の授業を行った。そのうちの2コマが連続コマの授業であった。ひらがなの指導はその連続コマの中で行った。

語彙学習は予習形式で行い、各課の導入のコマで、学習者が予習してきた語彙（その課の活動に必要な最低限の語彙（5語～10語））のクイズを実施した。1課を、文法の負担により、2-3回に分け導入し（課によって進度が異なっていた）、1学期で『初級1』の15課まで終えることができた。各回

の授業では、文法の練習、会話（発話）の練習、聴解の練習を行った。各課の作文は宿題にし、ひらがなの導入が終わるまで、作文のモデル文にはローマ字表記をつけて、学習者に渡していた。本コースではカタカナの指導は行わなかったため、カタカナ語彙にもふりがなをつけていた。また、読解も本コースの目標には挙げていなかったため、『まるごと』の読解は必要に応じて扱った。

### 3. 4 成果

1学期を終えたところ、教師から見た学習者の変化は以下のようであった。

- ①ほとんどの学習者は日本語学習への強い意欲を持ち続け、無遅刻無欠席で、授業に最後まで出席していた。
- ②語彙の定着度が高く、学生間の能力の幅はなかった。
- ③単文でのまとまった文章（一段落）が正確に書けるようになった。
- ④クラス内で大きなレベル差は生じなかった。テストの結果からもクラス内で一定のレベルが保たれたことがわかる。表2がそれを裏付ける前年度の後期のテスト結果との比較である。2015年度後期は、仮名が定着しなかったため、中間テストも期末テストもローマ字版で実施したが、2016年度前期には中間テストのみローマ字版で実施し、期末テストは、学習者の強い希望もあり、仮名版で実施した。また、2016年度前期の期末テストを受けた7名中4名の点数が90点を上回った。

表2 テスト結果の比較

年度	使用教材	中間テスト	期末テスト
2015年度後期	『はかせ』	最高点 88.5 最低点 22 平均点 52.8	最高点 87.5 最低点 28 平均点 68.9
2016年度前期	『まるごと』	最高点 94.5 最低点 73.5 平均点 82	最高点 96 最低点 46.5 平均点 81.9

⑤コミュニケーション能力が伸び、自発的発言（アウトプット）が増えた。学習者はただモデル会話をなぞるだけでなく、言いたい・聞きたいことに合わせて、話を展開することができるようになった。

⑥聴く力が伸びた。

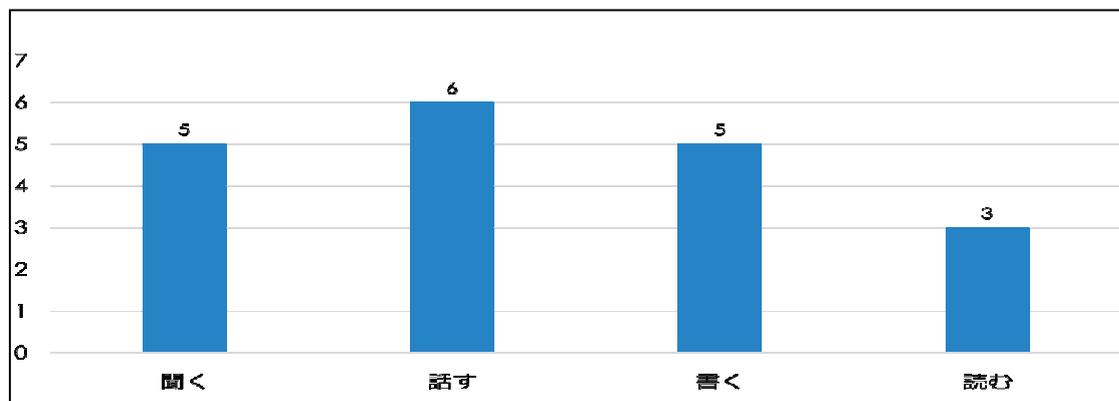
⑦学習者は自主的に語彙を増やしていた。例えば、『入門』の14課の語彙（ホテル、デパート、店、お寺、神社、病院、駅、喫茶店、銀行）の導入後の発話練習のために、学習者は自文化の状況に合わせて、「保育園／幼稚園、モスク、教会、運河」などを調べ、語彙リストを作成し、発話練習に使っていた。

### 3. 5 学習者の評価

『まるごと』の著者は、『まるごと』の特徴の一つを、「言語インプットを重視した指導法を取り入れた教科書」と記述する（木島、柴原、八田「『まるごと日本のことばと文化』における海外の日本語教育のための試み」、2014. 国際交流基金日本語教育紀要 第10号、p.115）。『まるごと』を使った本コースでもインプットが重視されたが、学期末に行った授業評価のアンケートからは、学習者

はインプットのスキルよりアウトプットのスキルのほうが伸びたということを感じたことがわかった。グラフ 4 が示しているように、学習者が最も伸びたと感じたのは「話す」能力であった。その次に学習者の評価が高かったのは「聞く」能力と「書く」能力であった。「書く」に関しては教師の評価も高く、学習者の自己評価と一致した。

グラフ 4 「日本語のどの技能が一番伸びたか」(複数回答可)



また、教科書の評価では、学習者は、よかった点としては、「トピック性の多様性」、「明確さ」、「カラフルで、文字が少なく写真でわかることが多い」ということを挙げた。一方、よくなかった点としては、『初級 1』からはローマ字表記がなくなり、また初出以外の漢字にはふりがながついていないということ指摘した。これらの問題点が自立学習を妨げていたという複数の意見があった。

### 3. 6 今後の課題

1 学期を終えたところ、『まるごと』使用により、本コースではそれなりの成果が得られたと言える。しかし、それと同時に、今後改善すべき問題点も見えてきた。次学期にその問題点の解決策を講じ、改善を図りたい。

#### ①語彙リストの語彙に訳をつけること

教師用のリソースには各課の語彙リストがあるが、訳がついていないため、本コースの学習者の使用言語に合わせ、英語や中国語の訳をつける。

#### ②『初級 1』以降のローマ字版の作成

会話文を中心に、ローマ字版を作成し、学習者への表記の負担を軽くする。

#### ③漢字にふりがなをつけること

A クラスでは、漢字の指導を行っていないため、『初級 1』以降で使用する課に出てくるふりがながついていない漢字にはふりがなをつける。

#### ④学習支援サイトの有効な使用法の検討

豊富な情報を提供している学習支援サイトから、本コースの学習者に最も必要な情報を選定し、自立学習の指導を行う。

『まるごと』を使用した本コースの試みは始まったばかりであるが、『まるごと』は教師にも学習者にも概ね評判がよかった。今後も、本コースの目標および学習者のニーズに合わせて改善しつつ、『まるごと』を使用していきたい。